

名詞述語を伴う繰り上げ構文 としての人魚構文

田口 智大

Master of Science by Research in Linguistics,
University of Edinburgh

奈良先端科学技術大学院大学
自然言語処理学研究室博士前期課程二年

`taguchi.chihiro.td0@is.naist.jp`

日本語学会第164回大会
2022年6月18日

概要

本発表では...

- 人魚構文を名詞述語の繰り上げ構文として扱う可能性の提示
 - 共時的根拠
 - 通時的根拠
- 名詞述語の繰り上げ構文という新たな(?)類型の提示

※ 本発表では論証の過程で主に日本語の例を用いますが、通言語的な一般性を目指します。

※ 発表は予稿の流れと概ね一致しますが、スライド内の例文番号と予稿での例文番号は必ずしも一致しません。

キーワード: 統語論、類型論、繰り上げ構文、人魚構文

人魚構文の概略

- 角田(2011, 2012)、Tsunoda (2020) が定式化
- 体言締め文、文末名詞文とも呼ばれる
- 表層的には [節]+名詞 (+コピュラ) の構造を持つ(1)

(1) 日本語<日琉語族[15]

<i>hanako=ga</i>	<i>nagoya=ni</i>	<i>ik-u</i>	<i>yotei=da</i>
Hanako=NOM	Nagoya=DAT	go-ADN.NPST	plan=COP
[節]	名詞=コピュラ

日本語以外での人魚構文の例

接辞・接語化した周辺的な人魚構文は除く。

(2) 伊良部島方言<宮古語<琉球語群<日琉語族[13]

kai=ga=du sac=n idi-r kutu
 3SG=NOM=FOC first=DAT go_out-ADN.NPST thing

‘彼（女）が先に行くべきだ’

(3) 朝鮮語<朝鮮語族[10]

chinkwu=nun ilpon=ey ka-l yeyceng=i-ta
 friend=TOP Japan=DAT go-ADN.PROS plan=COP-DECL

‘友達は日本に行く予定だ’

(4) アムド・チベット語<チベット・ビルマ語派<シナ・チベット語族[3]

arja=kə nor ptsoŋ-ju ntʂ^harzə rɛ
 father=ERG yak sell.IPFV-NMLZ.GEN plan COP.B

‘父がヤクを売る予定だ’

日本語以外での人魚構文の例

- (5) ビルマ語<チベット・ビルマ語派<シナ・チベット語族[8]

tù dì hín=gò sá=dê poun(=bé)
 3SG this curry=KO eat=ADN shape(=EMP)

‘彼がこのカレーを食べたようだ’

- (6) クルク語<北部ドラヴィダ語派<ドラヴィダ語族[11]

a:s-hi: tamba-s-in ilc-ka: caqde: rahc-a:
 3SG.M-GEN own.father-M-ACC fear.PS-PST.VADJ necessity COP.PS-PST.3SG.NM

‘彼が父を恐れていたからであった’

- (7) シダーマ語<クシ語派<アフロアジア語族[9]

íse faraššó guluf-f-annó gara-a=ti
 3SG.F.NOM horse.ACCOBL ride-3SG.F-IPFV.3 manner-LV=NPC.PRED.MOD

‘彼女は（習慣的に）馬に乗るようだ’

日本語以外での人魚構文の例

- (8) タガログ語<マレー・ポリネシア語派><オーストロネシア語族[7]

plano ni=Noy na b·um·isita sa=Davao bukas
 plan GEN=Noy LK visit<AF:INF> OBL=Davao tomorrow

‘ノイは明日ダバオに行く予定だ’

- (9) ベンガル語<インド・イラン語派><印欧語族[6]

tar tokio=te jawar kotⁿa
 3SG.GEN Tokyo=LOC go.NMLZ.GEN word

‘彼は東京に行くことになっている’

- (10) タタール語<キプチャク語群><テュルク語族[14]

siŋa joqla-rya röxsät
 2SG.DAT sleep-INF permission

‘君は寝ても良い’

人魚構文の例？

以下の例は人魚構文として報告されていないが、人魚構文と類似した構文を持った例:

(11) ロシア語<スラヴ語派<印欧語族

nam *pora* *pogovorit'*

1PL.DAT time PF:talk:INF

‘(そろそろ) 話し合う時間だ’

繰り上げ構文の概略

主語から主語への繰り上げ構文 (subject-to-subject raising)

(12)や(13)のように、非定形動詞 (non-finite verb) 節中の主語が主節の主語の位置へと繰り上げられている構文

- 典型的に動詞や形容詞
- アスペクト、モダリティ、証拠性など、機能的役割を果たす
- De Haan (2007): 主観化 (subjectification) [2]

(12) *John_i **seems** [t_i to leave].*



(13) *John_i **is likely** [t_i to leave].*



Langacker (1995) [12]: 繰り上げ構文述語の例

Example

- 助動詞 : *may, will, must, can, used to*
 - 形容詞など : *sure, certain, liable, (un)likely, apt, bound, destined, supposed, set, gonna, about*
 - 動詞 : *seem, appear, tend, chance, turn out, prove, happen, fail, begin, start*
-
- **名詞述語は言及されていない**
 - 通常は助動詞は繰り上げ構文述語として扱われないが、さらに文法化を経たものとして連続的に捉えることができる

先行研究

Tsunoda (2020) [15]: 人魚構文の通言語的・記述的研究

- [節] は連体修飾節ではない
- 「行く予定だ」のような動詞＋名詞述語で複合述語 (compound predicate) を形成している
- そのため、人魚構文は ((14)のように) 単節 (monoclausal) である

(14) *hanako=ga nagoya=ni ik-u+yotei=da*
 Hanako=NOM Nagoya=DAT go-ADN.NPST+plan=COP

先行研究

連体修飾ではない根拠

- 主題のハを用いることが可能 cf. (15), (16)
- ガ・ノ交替が不可能
- 人魚構文名詞の直前に他の修飾語を置くことが不可能

(15) 人魚構文

hanako={wa/ga} nagoya=ni ik-u yotei=da
 Hanako={TOP/NOM} Nagoya=DAT go-ADN.NPST plan=COP

(16) 連体修飾

*hanako={*wa/ga} kai-ta hon*
 Hanako={TOP/NOM} write-ADN.PST book

先行研究

連体修飾ではない根拠

- 主題のハを用いることが可能 cf. (15), (16)
- ガ・ノ交替が不可能 cf. (17), (18)
- 人魚構文名詞の直前に他の修飾語を置くことが不可能

(17) 人魚構文

hanako={ga/#no} *nagoya=ni* *ik-u* *yotei=da*
 Hanako=NOM/GEN Nagoya=DAT go-ADN.NPST plan=COP

(18) 連体修飾

hanako={ga/no} *kai-ta* *hon*
 Hanako={NOM/GEN} write-ADN.PST book

先行研究

連体修飾ではない根拠

- 主題のハを用いることが可能 cf. (15), (16)
- ガ・ノ交替が不可能 cf. (17), (18)
- 人魚構文名詞の直前に他の修飾語を置くことが不可能 cf. (19), (20)

(19) 人魚構文

hanako=ga nagoya=ni ik-u (#yoi) yotei=da
 Hanako=NOM Nagoya=DAT go-ADN.NPST good plan=COP

(20) 連体修飾

hanako=ga kai-ta yoi hon
 Hanako=NOM write-ADN.PST good book

先行研究

複合述語を持った単節とするメリット

- 文法化現象（機能語→接語化→接辞化）との相性が良い
- 人魚構文名詞への修飾語の制約を説明できる
- 連体修飾節では説明できないガ格標示・主題標示の制約を説明できる

複合述語を持った単節とするデメリット

- そもそも compound predicate の定義が不十分であり、形態統語的にどのような立ち位置にあるのか不明
- 単節と言い切るのには問題がある cf. (21)
- 主格を取らない人魚構文を説明できない
- 複合述語でなくても格標示や修飾の制約は説明可能（後述）

(21) 両方の節で否定

hanako=ga nagoya=ni ika-nai yotei=de(=wa) nai
 Hanako=NOM Nagoya=DAT go-NEG.NPST.ADN plan=COP(=TOP) not

繰り上げ構文としての人魚構文: 共時的分析

仮説

人魚構文は、統語的に繰り上げ構文の一部として扱うことができる。

人魚構文が繰り上げ構文であると仮定すると、「花子が名古屋に行く予定だ」という文は次のような構造を持っている。

(22) *hanako=ga_i [t_i nagoya=ni ik-u] yotei=da*
Hanako=NOM Nagoya=DAT go-ADN.NPST plan=COP

繰り上げ構文の判定テストを人魚構文に適用する。

繰り上げ構文のテスト

- 受動テスト: 埋め込み節を受動形にして意味役割が変化しなければ繰り上げ構文
- 慣用句テスト: 慣用句に用いたときに慣用句としての意味を保っていれば繰り上げ構文

受動テスト

繰り上げ構文の受動テスト

- 繰り上げ構文では受動文にしても意味役割関係が変化しない cf. (23), (24)
- コントロール構文では、主節の主語はコントロール述語の意味役割も持つ cf. (25), (26)

(23) 繰り上げ構文、能動態

John seems to break the vase.

(24) 繰り上げ構文、受動態

The vase seems to be broken by John.

(25) コントロール構文、能動態

John tries to break the vase.

(26) コントロール構文、受動態

The vase tries to be broken by John.

人魚構文の受動テスト

(27) も (28) も叩く人（動作主）は *Hanako*、叩かれる人（被動作主）は *Taro*

(27) 人魚構文、能動態

hanako=ga [*taroo=o tatak-u*] *yotei=da*
 Hanako=NOM Taro=ACC hit-ADN.NPST plan=COP

(28) 人魚構文、受動態

taroo=ga [*hanako=ni tatak-are-ru*] *yotei=da*
 Taro=NOM Hanako=DAT hit-PASS-ADN.NPST plan=COP

受動テスト ✓

人魚構文は繰り上げ構文の受動テストに通る（ものが存在する^{a)}）

^{a)} 「つもり」などの人魚構文名詞はこのテストに通らないため、全ての人魚構文名詞に通用するわけではない。

慣用句テスト

- 慣用句 (29) は、(30) のように、繰り上げ構文述語と用いてもその特殊な意味が保たれる。
- 他方で、(31) のように、コントロール述語ではその意味が失われる。

(29) *The cat is out of the bag*
‘秘密が暴露されている’

(30) 繰り上げ構文
The cat seems to be out of the bag
‘秘密が暴露されているようだ’

(31) コントロール構文
#*The cat tries to be out of the bag*
‘猫が袋の外に出ようとしている’(?): 意味が失われている

人魚構文の慣用句テスト

(32) と (33) の間に慣用句自体の意味の差はない

(32) *asi=ga boo=ni nar-u*

leg=NOM stick=DAT become-NPST

‘足が非常に疲れる’

(33) *asi=ga boo=ni nar-u yotei=da*

leg=NOM stick=DAT become-ADN.NPST plan=COP

‘足が非常に疲れると予想されている’

慣用句テスト ✓

人魚構文は繰り上げ構文の慣用句テストに通る（ものが存在する^{a)}）

^{a)} これも同様に、「つもり」などの人魚構文名詞はこのテストに通らないため、全ての人魚構文名詞に通用するわけではない。

連体修飾節と異なる制約に対する説明

人魚構文の連体修飾節が典型的な連体修飾節と異なる点

- ① 主題のハを用いることができる
 - ② ガ・ノ交替が不可能
 - ③ 人魚構文名詞のさらなる修飾が不可能
-
- ① 主節に繰り上がっており、主節主語として振る舞うため主題のハを持つことができる
 - ② 同様に、主節主語となっているためノ格は取れない¹
 - ③ 人魚構文述語の構造が $[N_{MC}(\text{Cop})]^{PredP}$ であり、 $[NP(\text{Cop})]^{PredP}$ であるからと考えられる。つまり、Adjunct 規則が適用できない。

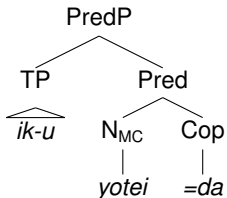
¹少なくとも東京方言

人魚構文述語の構造（最小主義での説明の例）

- 典型的な連体修飾 (35) では Adjunct rule による NP の修飾が可能
- 人魚構文 (34) の述語には NP がなく Adjunct rule による修飾が不可能

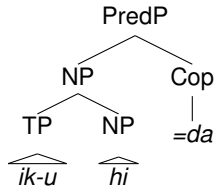
(34) 人魚構文:

‘(花子が名古屋に) 行く予定だ’



(35) 典型的な連体修飾:

‘(花子が名古屋に) 行く日だ’



人魚構文が繰り上げ構文の一種だとすると.....

Tsunoda (2020) [15] (再掲)

- [節] は連体修飾節ではない
- 「行く予定だ」のような動詞＋名詞述語で複合述語 (compound predicate) を形成している
- そのため、人魚構文は ((14)のように) 単節 (monoclausal) である

本研究の仮説: 繰り上げ構文としての人魚構文

- [節] は統語的には連体修飾節である
 - 人魚構文名詞は繰り上げを引き起こしている
 - そのため、人魚構文は単節ではない
- 人魚構文の単節性についてはもともと問題があった
 - [節] は通言語的に非定形 (non-finite) が一般的である (後述)

通言語的観察

通言語的には以下の点でバリエーションが見られる

埋め込み節の動詞の形態: 非定形 (non-finite)

- **連体形型**: 日本語、伊良部島方言、朝鮮語、ビルマ語、シダーマ語
- **動名詞型**: アムド・チベット語、ベンガル語
- **不定詞型**: タガログ語、タタール語 (+ロシア語)
- **動形容詞型**: クルク語

主語 (動作主) の格標示

- **主格系型**: 日本語、伊良部島方言、朝鮮語、アムド・チベット語、ビルマ語、シダーマ語、タガログ語
- **属格系型**: クルク語、タガログ語、ベンガル語
- **与格系型**: タタール語 (+ロシア語)

格標示のバリエーションは主格の人魚構文名詞による表層的な格付与の違いによって生じていると説明できる。

人魚構文の構造の派生

今までの議論を形式的かつ一般的に要約すると、人魚構文の統語的構造は以下のように導き出されると仮定できる。

1. [NP_{SUBJ} PredP]^{IP} … 基底
 2. [NP_{SUBJ} PredP]^{IP} + [N_{MC} (Cop)]^{PredP} … 人魚構文述語を付加
 3. [NP_{SUBJ*i*} [t_i PredP] [N_{MC} (Cop)]^{PredP}]^{IP} … 繰り上げ
 4. [NP_{SUBJ*i*} [t_i PredP] [N_{MC} (Cop)]^{PredP}]^{IP} … 形態的格を付与
- ← 格

- 表層的な形態的格はもっとも最後の段階で付与されるため、人魚構文述語がどの格を支配するかによってバリエーションが生じうる。
- 一般的に、名詞は連体形、動名詞形など様々な形式によって修飾することが可能なため、非定形節の動詞の形態にバリエーションが生じうる。

分析の問題点(1): 接語・接辞化した人魚構文名詞

本研究の分析では、人魚構文名詞が名詞として独立していることを前提としているため、接語・接辞化した例は直接説明できない cf. (36)

(36) ビルマ語 [8]

[tù dì hín=gò sá=dǎ]=lò(=bé)
 3SG this curry=KO eat=ADN=like(=EMP)

‘彼はこのカレーを食べたようだ’

しかし、繰り上げ構文自体も助動詞と通時的に連続的な関係があることから、通時的には連続的な現象として扱える可能性がある。

分析の問題点(2): 定形節を伴うタガログ語の人魚構文

タガログ語の人魚構文名詞 *mukha* ‘顔’ は定形 (finite) の埋め込み述語を伴う cf. (37)

(37) タガログ語 [7]

mukha-ng [*bi-bisita* *si=noy* *sa=davao* *bukas*]
 face-LK AF:CONT-visit TOP=Noy OBL=Davao tomorrow

‘ノイは明日ダバオに行くようだ’

主語 *si=Noy* が埋め込み節から繰り上げられたものであるという根拠はないため、さらなる議論が必要

ここまでの要約

- 人魚構文は統語的に**繰り上げ構文**として扱うことが可能
→ 名詞述語が引き起こす繰り上げ構文という**新たな類型**の提示
- 人魚構文は**単節ではない**
- Tsunoda (2020) [15] での分析の問題点を解消
- 一部のケースを除いて、**通言語的に有効である**

通時的分析

人魚構文は、共時的側面のみならず、通時的にも繰り上げ構文と並列して扱うことが可能であることを示す。

具体的には、以下の二つの古典的な文法化の記述に基づいて比較検討を行い、人魚構文が繰り上げ構文と同様の文法化の段階にあることを確認する。

- Heine & Kuteva (2002) [4]: 文法化の四つの特徴
- Hopper & Traugott (2003) [5]: 文法化のクライン

Heine & Kuteva (2002): 文法化の四つのメカニズム

Heine & Kuteva (2002) は、文法化現象が典型的に持つ特徴として、以下の四つを挙げている[4]。

- ① 脱意味化 (desemanticization) : 意味内容の喪失
- ② 分布拡張 (extension, context generalization) : 新たな文脈での使用
- ③ 脱範疇化 (deategorialization) : 形態統語的特徴の喪失
- ④ 音形縮約 (erosion, phonetic reduction) : 音声的実体の喪失

繰り上げ構文と人魚構文

- 繰り上げ構文: 脱意味化・分布拡張 e.g. *appear*
- 人魚構文: 脱意味化・分布拡張 e.g. *yotei*

Hopper & Traugott (2003): 文法化のクライン

(38) 内容語 (content word)

→ 文法的語 (grammatical word)

→ 接語 (clitic)

→ 接辞 (affix)

繰り上げ構文と人魚構文

- 繰り上げ構文: 文法的語の段階
- 人魚構文: 文法的語の段階 (通常の名詞とは異なる統語構造)

例外:

- 接語化した名詞を伴う人魚構文 (例: ビルマ語の =lò)
- 助動詞化・接語化したSSR構文の亜種 (例: 英語の *will*, =’ll)

これらは脱範疇化や音形縮約を経ている上、文法化のクラインにおいてもさらに接語の段階まで進んでいる。

結論

本研究で示したこと

- 人魚構文を**繰り上げ構文**の一部として扱える可能性
 - **共時的（統語的）**分析による証拠
 - **通時的**な比較検討による一貫性
- 名詞述語を伴う人魚構文という**新たな類型**の提示
- Tsunoda (2020) [15] の分析の問題点の解消
 - 日本語の人魚構文の埋め込み節は**連体修飾節**である
 - （典型的な）人魚構文は**単節ではない**
 - compound predicate という形態統語的に不明瞭な概念を避け、理論的に研究が蓄積されている繰り上げ構文の中に位置付ける

結論

	繰り上げ構文	人魚構文
埋め込み述語の形態	不定詞	連体形（日本語、伊良部島方言、朝鮮語、ビルマ語、シダーマ語） 動名詞（アムド・チベット語、ベンガル語） 不定詞（タガログ語、タタール語、ロシア語） 動形容詞（クルク語）
主語の格標示	主格	主格（日本語、伊良部島方言、朝鮮語、アムド・チベット語、ビルマ語、シダーマ語、タガログ語） 属格（クルク語、タガログ語、ベンガル語） 与格（ロシア語、タタール語）

Table: 繰り上げ構文と人魚構文の形態統語的比較。

		繰り上げ構文	人魚構文
Heine & Kuteva (2002)	脱意味化	✓	✓
	分布拡張	✓	✓
	脱範疇化	?	?
	音形縮約	?	?
Hopper & Traugott (2003)	内容語	✓	✓
	文法的語	✓	✓
	接語	?	?
	接辞	—	?

Table: 繰り上げ構文と人魚構文の通時的比較。薄字の✓はその段階を終えていることを示す。?は周辺的であることを示す。

引用文献 I



F. de Haan.

Raising as grammaticalization: the case of Germanic SEEM-verbs.
The Italian Journal of Linguistics, 19:129–150, 2007.



S. Ebihara.

Amdo Tibetan.
In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 419–464. Mouton de Gruyter, 2020.



B. Heine and T. Kuteva.

World lexicon of grammaticalization.
Cambridge University Press, 2002.



P. J. Hopper and E. C. Traugott.

Grammaticalization.
Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press, 2nd edition, 2003.



K. Huziwara.

A contrastive study of external adnominal clauses in Japanese and Bangla.
Bangabidya: International Journal of Bengal Studies, 10:358–367, 2018.



M. Katagiri.

Tagalog.
In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.

引用文献 II



A. Kato.

Burmese.

In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.



K. Kawachi.

Sidaama.

In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.



J. Kim.

Korean.

In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.



M. Kobayashi and T. Tsunoda.

Kurux.

In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.



R. W. Langacker.

Raising and transparency.

Language, 71:1–62, 1995.



M. Shimoji.

Irabu Ryukyuan.

In T. Tsunoda, editor, *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*, Comparative Handbooks of Linguistics, pages 781–816. Mouton de Gruyter, 2020.

引用文献 III



C. Taguchi.

Mermaid Construction in Tatar.

In Proceedings of the 162nd Conference of the Linguistic Society of Japan, 2021.



T. Tsunoda.

Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance.

Comparative Handbooks of Linguistics. Mouton de Gruyter, 2020.



角田太作.

人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献.

国立国語研究所論集, 1:53–75, 2011.



角田太作.

人魚構文と名詞の文法化.

国語研プロジェクトレビュー, 7:3–11, 2012.